

寛永諸家譜

清和源氏甲九冊之内
義家流之内新田流

内閣文庫			
番號	和	20199	
冊數	186	(7)
函號	特	76	1

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 cm

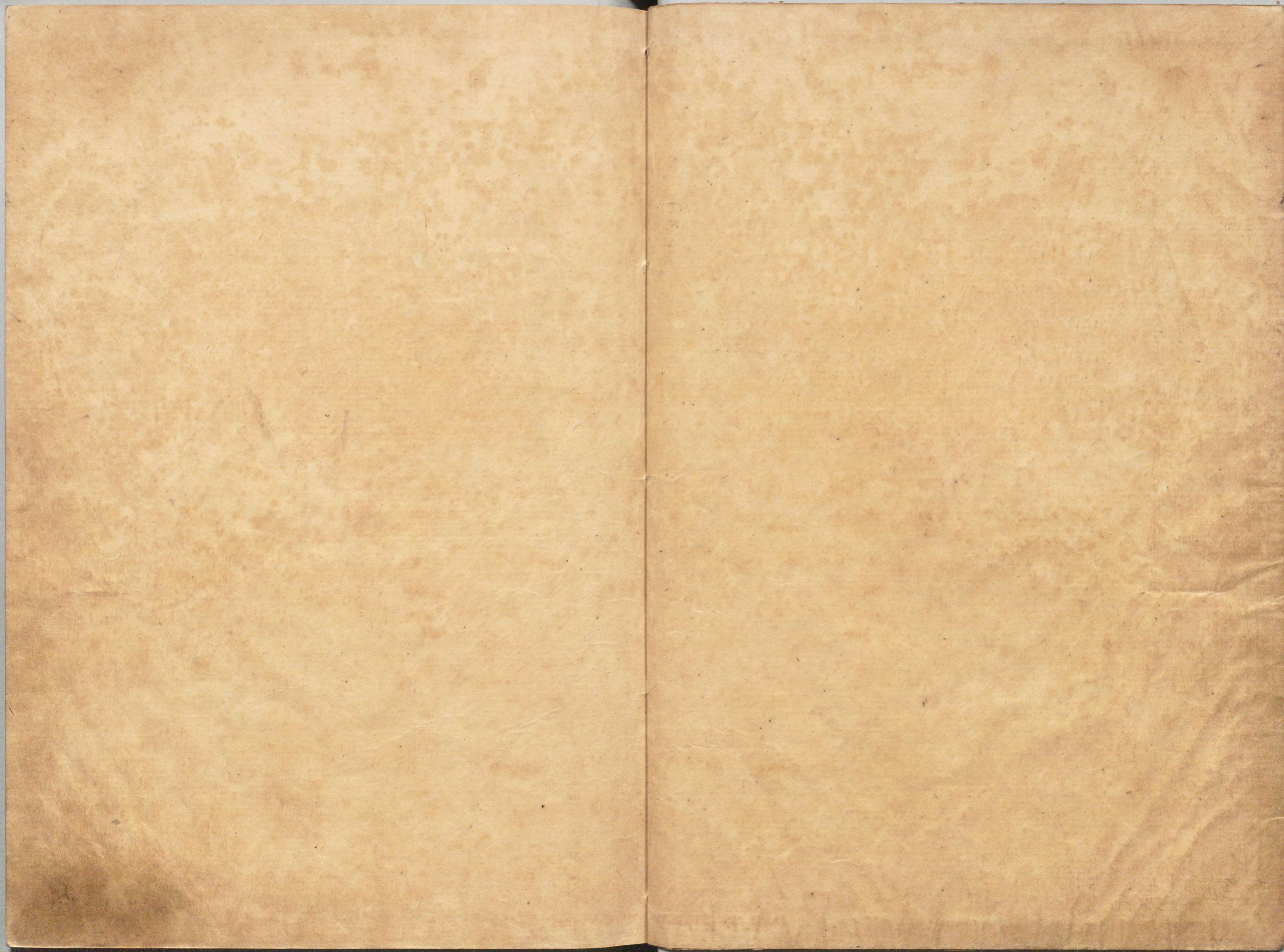
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale

G Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak





松平

寛永諸家系圖傳

清和源氏

甲三

義家流

松平

親忠庶流

● 親忠

淺草文庫

親長

若津太郎

宗元

源次郎

加賀守

三列

大領と領寸

九十二歳

〜死去

法名宗忠

長親

宗正

源次郎

た迫

領地月分

六十二歳

〜死去

法名成心

宗晴

源次郎

領地月分

二十九歳

〜死去

法名玄香

親清ちかひら

中なかつの忠ちゆう昭しやう祖そ未みふふんんくくくく

親業ちかひら

源次郎 左衛門 和泉守 依地日赤

母ははの清康きよかみ君きみの御ごじじととらら後のちはは足あし助すけととすす

六十三歳むそくとと死しとと法はふ名な淨じやう正せい

真業まごひら

源次郎 左衛門 依地日赤

母ははの橋井内膳はしらいちだんととすす

東照大権現親業とうしやうだいこんげんちかひらとと依よりりのの左さ衛ゑ門もん依よ地ぢ日ぢ赤せき

の款くわん必かならずの境さかいちちりり真業まごひらゆゆとと是こゝとと守まもるる

命いのちととてて沙書さしよとと活いるる

懸川かきがわ者もの子この儀ぎ並ならぶ泉列いづみりやく一ひと申まをす

御ごをを依よりりたた来きた廿にじふ日ひ懸川かきがわ迄まで衣い履づき

作つく候こう目めととりり一ひと刻こくとと一ひと被ひ急いそぐ

ととりり候こう

九月十日 家康御朱印

松平左兵衛

大権現真業まごころ 命まこと 下笠居鴻このかた 出陣しゅんじん

しるのとも 御書ごがき と給たま けり

御右儀ごごうぎ 在あ 笠居鴻このかた 出陣しゅんじん 中ちゆう へ

有あ 御左陣ごさじん 作つく 秀細ひょうさい 石川いしかわ 伯耆伯耆 守まも 申まを

誠まこと の 乃な 給たま けり

八月十二日 家康御判

松平左兵衛

大権現おほごんげん 是こゝ 世よ 免ゆる たり 且かつ 今いま 上かみ 其その 業わざ 軍ぐん 切きり

あり

りるゆこ 小山こやま の うち 右みぎ 永なが 為な 治ち 幸さい 玉たま 殿のり 窪くぼ

是こゝ 窪くぼ 栢はく 原はら あり びよ 山やま 川がわ 舟ふね 市いち 於お て

或ある 子こ 受う 文ぶん の 地ち と 御ご 加か 保ほ あり 上かみ 道みち 流なが

といま じむるもの 御判ごはん と 給たま けり

町まち 永なが 禄ろく 十二じふに 月つき 十じふ 二に 日ひ 御判ごはん と 給たま けり

真業まごころ 常とこ 業わざ

真業まごころ 常とこ 業わざ

大権現の先手としてさびく戦場へ赴く
越後の守主長尾輝虎

大権現とまじりて信人と書と志業

よとら輝虎の家をぬく又副状あり

元龜元年に河内守のとき志業

大権現の先陣は列して約金軍とやがり

うれ切なり

同之を別三方原合戦のとき河合

久次郎信玄が兵ようしてとてあやう

ろくろと志業ころころ口とあて戦い

しけまう敵陣とらやあて久次郎

まぬろくろと志業ころころ

て引きあがり

天正三年に河内守合戦のとき武田

信玄が兵馬山よりあて

大権現伝と相ついで酒井左衛門尉忠

次は命じて葛原の城とせしむ時御家

人のうらよ武事よとてあての撰

ゆく忠次よさるるつと萬葉とせりし
其葉が家人と六孫と申すあり孫
萬が栗山のとりとせりやうそのり
ゆぐ是より長藤の合戦大に勝利と
ゆぐまの播磨殿小と
甲州碓氷川よ公張のとこ
大権現御書と其葉よ孫りつと川信則
のさるる武節とまのりし

同年

大権現後川友枝よ御上馬ありて遺傳
れまの其葉とつとひとて歌とまの
まのりしとるま其葉とて人おとふ
ゆ歌ありまのり高目の城の山よのり
其葉とまのり家人松平久物
松平集院河合常力梅村七郎八郎信を回
次常求を友とて武井角太出河合
友十郎松平源太郎おのり青級と
ゆぐ

同九月甲州の兵遠出する神の城は

まじくごころ

大権現徳軍と引かき先とせめし志業

城をこらしくらしくして戦功とせげし城

内よりめらしくすふとさ

大権現福徳城初号五人と城中へつりて

信りし城とつひくちりぞりし此死を

せりし終へしとさしと珠中の兵

信りしとつりし城初号五人城とせりし

織初が後才城中より書し書を

織初より書し織初号五人

大権現は福して城兵のくさる事を

書しし其書をくさる先と披見あり

けさうれしとる城牛糧つきて飯

こよ織初とんと迫り松平志業が傳

をしして戦死せんやと

大権現はと御使してとれら志業とを

く是が後と三月の御中び

ろくろく真宗成吉思汗の御代
とゆふ

同十三年三月十日官死云三十七歳法名
道翁

家系

源次郎 和泉守 三河大佐

母仁連本戸曰之敏以がむと火松平母
が婦

天正十年三月八日
とつ井之忍大佐とゆふ

同十二年尾州也久手合戦の時家
系初めらるる松平五郎家
より引わくは陣とて後
用事御入國の時五郎傳つた
より重なるりその中
系分まつ

同十三年龍川左を尾州の前田
を

多くしる時五五集 号是しるし
戦功あり家系が家人河合常力同文書
純とわら寸松平久助同新助同年純
未依在集し井かき梅村長八郎
とく物武井角七橋つ大橋新ら付
死と

月十五の家系十三歳の時

大権現の御前しる元帳し御講の家
字と給り

同十八

大権現相列小回原し御を後の時家系依

身と町よ十六歳

大権現開東八列し依し給り時三六歳

とくしあし上列相波し家系し給り

一万石と領し

同十九年奥州し御公陣の時依し

時よ十七歳

孝長元年五月豊臣秀吉家系し依し

後新(あきら)のりし

大権現(おほごんげん)の御湯(ごゆ)と元日(げんじつ)御礼(ごれい)のとき家業(いえご)を折敷(せしき)と持(も)つて御前(ごぜん)何儀(なにぎ)と永(とこ)井(い)右(みぎ)を養(やしや)ふとつて折敷(せしき)の内(うち)入(い)り申(まを)す
是(こゝろ)より家業(いえご)折敷(せしき)とあつて御湯(ごゆ)と

月十九日(つきいそくにじゅうくにち)正月(しょうげつ)

大権現(おほごんげん)の御湯(ごゆ)と元日(げんじつ)御礼(ごれい)の時(とき)古瀬院(ふるせゐん)殿(との)御(ご)申(まを)す

まふと酒井(さかゐ)社(やしろ)の御(ご)申(まを)す
と神(かみ)と申(まを)す
後新(あきら)の御(ご)申(まを)す
け事(こと)上(かみ)同(どう)は連(れん)一(いつ)
古瀬院(ふるせゐん)殿(との)の命(いのち)より家業(いえご)神(かみ)とつて折敷(せしき)と持(も)つて二日(ふたひ)の御(ご)申(まを)す
又(また)権現(ごんげん)と申(まを)す

同年(どうねん)二月十九日(にがついそくにじゅうくにち)死(し)す
年(ねん)四(よ)十(じゅう)は名道(なみち)見(み)

真次

二郎次郎 左衛門 縫殿助

享長二月四月武州上州の賊徒の首
長十二人上段敵隊におおく一屋の内
よりそとらふと武をとりてまのりた
真次是より討て二人と捕へり此
一人の獲へり是とつぎ一人の生捕り
その餘の家人是とらふるをわしひ
生捕り一人を斬りしげりしは是とれ

小づとれ此時真次二十一歳

元和元年五月七日大坂合戦の時捕り
あつて款無一人とらふる家三九よ葉
入と置武志とおとらひつ井は是と
うらとらふる首級二つと捕り御旗取
家して

名酒院敵の湯へちるうれら墨山は供
なり首の實檢の時酒井祐兵衛志
世印多佐渡守正信真次が切と大か

ことしてその事と帳面より寸何より
十九年真次大坂城より中津より
とらとさ戸田あり底とさりて
あよあふ款兵衛二中とさるは
寸真次是とさる馬とさるは
とさるは

朱具

左近衛

實ハ内藤より信廣が子なり真次是
や

寛永九年七月

將軍家と赤湯より

同日十二月六日從五位下と

朱次

左七郎

寛永十九年八月朔七日

守江州 上使として参りてつけりし
京極の御後守 同丹後守 若口村陣
大坂の御後守 今我をいふ 衆方 後
して先より 下守 横合より
はく 五月七日 若後守 丹後守
若前守 若前守 若前守 又 森
口より 出陣 して 大坂 へ
衆方 若前守 若前守 若前守
まじら 入 守 方 守

同二年之 後守 若前守

大坂 現 若前守 永井 右衛門 養老

若前守 若前守 若前守 若前守
若前守 若前守 若前守 若前守
若前守 若前守 若前守 若前守
若前守 若前守 若前守 若前守

寛永十一年 五月

將軍家の命 若前守 若前守 若前守

遠州 若前守 若前守 若前守
若前守 若前守 若前守 若前守
若前守 若前守 若前守 若前守

和案

中道頭 但守 徳川岩村よきる

元和二年十一月 官人よきるを

名徳院教よけりしよし

同年十二月 御命よきり 河前

を侍と

同三月 御切米五百石と給りし

同六月 名命よきり 後五位下は叙

但馬守よ侍と

同七年三月 御地村よきり 米地千石と給

りしよし 御勤仕よきり

いづれに日九月 上は御達一は

しりし 御書院教よ勤心

寛永十年

將軍家より山加預りし 常陸の御

二百石と給り 御金千二百石と給

宗久むねひさ

源次郎

法州岩村の生家

寛永十七年六月朔、神々

お軍家より福一を討ち八歳

宗政むねまさ

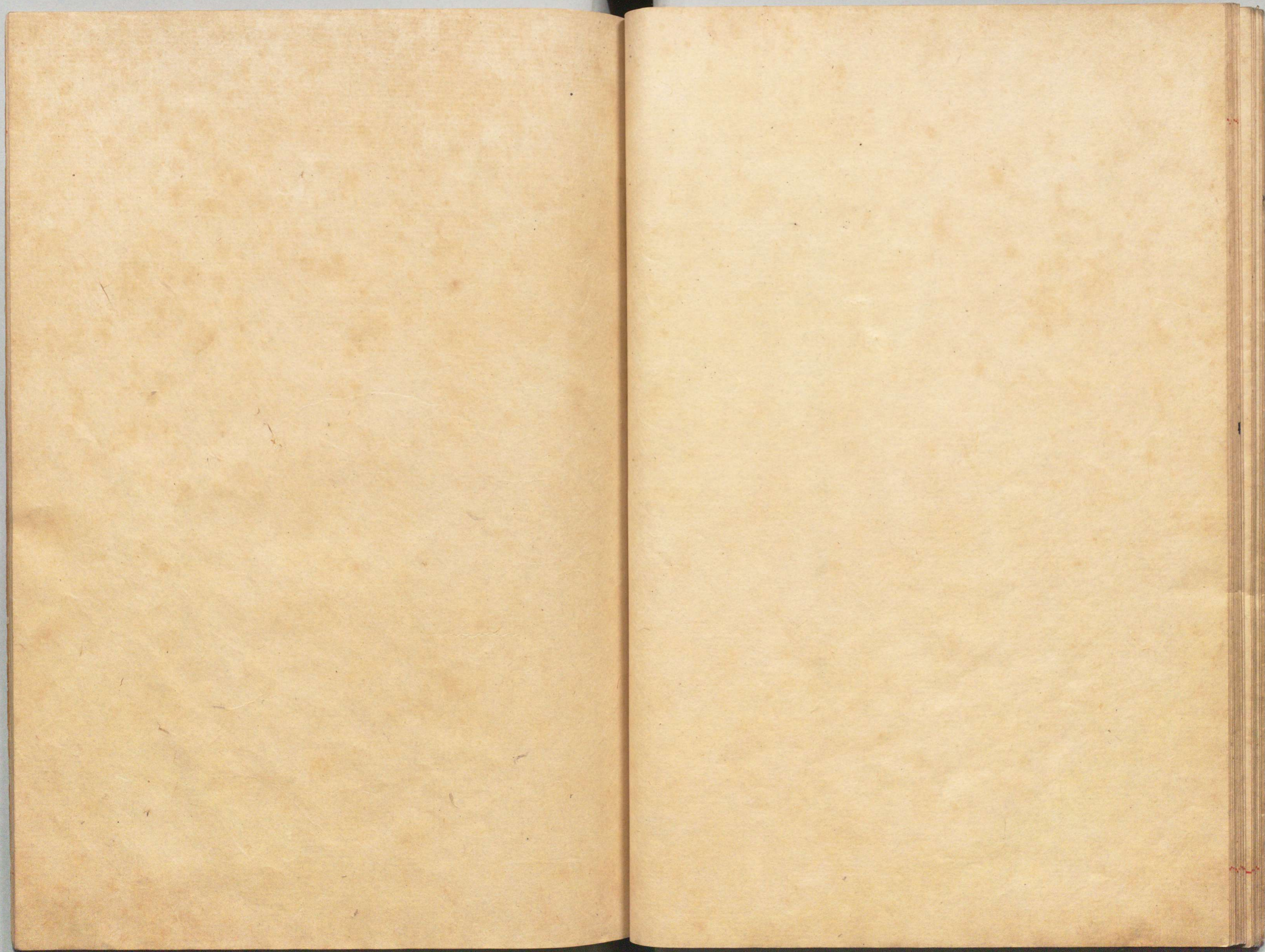
助十郎

和泉守宗方わいずみ せうかた

家紋葵いんのゑん けもん

家業一けごう ひとし

葛の葉くずのは



親法
親忠氏大徳の庶流

傳説

左馬尉

四十歳一死一

近正

五左衛門

初、松平和泉守家業ムネノが家ムネノのり家業

知チカりたる様サマは是よりコノよりコノよりコノ我ワガ湯ユ

〜おと〜

同十八日

大佐隈用東海入玉の後 石上をたつて

なりとけの玉群馬那之を統よらわくま

子五百名と統り

孝長五子進正為左衛門尉内左衛門尉

尉松平と敏江と同一く伏見御城の御

守番と勤し時々筑前中津に秀林石田

三成等が信從子進正にて伏見の御城とせし

進正とけとて入るるつづ 徳紀とてつづ

歿去死一底とてつづよめかへし月朔

伏見御城のときとて香の丸とてあはく進正秀

秋が去日亥角と助とおとつづつ井

付死と年五十二 日夜の傍に行紙
山城の事

一生

新次郎 五左衛門尉

石川伯耆守教正進心とて一生人質

つづてを州侯香の御城とてつづ

孝長十五歳初つり

名徳院殿と稱なづけし十六歳

同十七歳より所しよ者しよと勅つじ

大坂御殿の御陣ごじんより多おほ好この監まゆりし殿ごん

して侍しやくなむ

五月七日天皇てんかうち口くちよりおわく首級くびぎとゆわ

御政陣ごせいじんよりいしるはにおわく領地りやうぢより百ひゃく名なと

給たまひ

寛永十の二に百ひゃく名の御初ごはつありし初はつ命めい

七百しちひゃく名なと領りやうと

威重いぢゆう

右みぎ衛ゑの御監ごまに

孝長十三歳しんざいより十五歳ごじゆうよりして初はつり

大將おほしやうと稱なづけしより後のち五位ごい下げより叙たせし

同十九歳より大坂陣おほさかじんのとき御命ごめいよりして

相州小田原さうしゅうおだわらの御城番ごじやうばんと勅つじ

元和元年げんわごうねんより大坂御殿おほさかごんのとき御酒ごしゆ御命ごめい

忠昭

左を御監

寛永九年の御り

將軍と御福

同十一年同七月

將軍の命より飛山と

此由より来地と

月十七日位下

為季

武長御尉

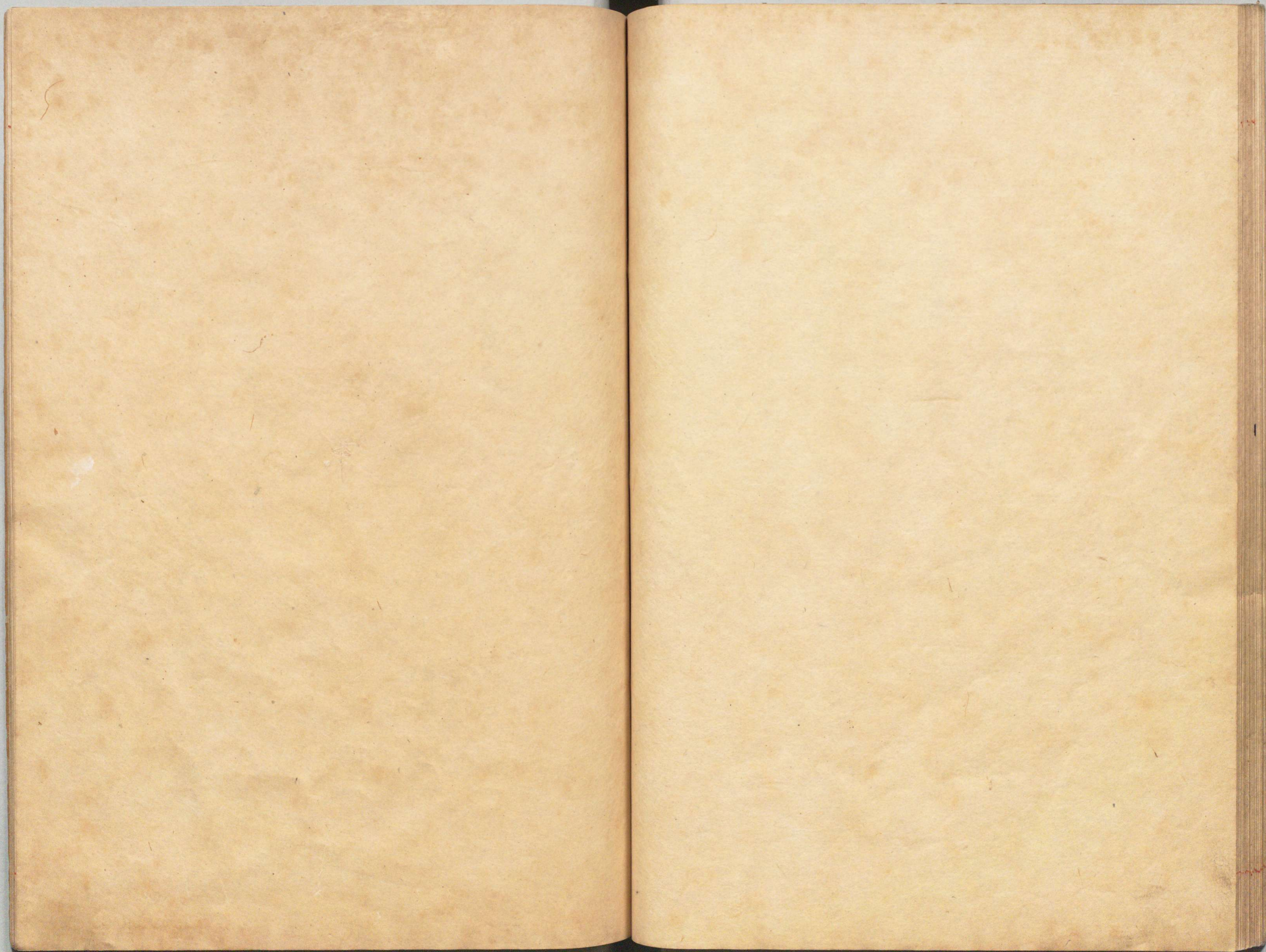
寛永十二年八月御り

將軍と御

同十八年同月 御令より御小姓

の御書と御心

家紋丸内釘費



貞次

大谷麻流

いさごう北野とくろを詳よせ候

松平八島左衛門

大谷の麻子代々大谷の竹内宮石

いさご

宗次

永年 生誕不可

廣忠ひろたけの

東照大権現より侍り

永祿三年上川義之尾良子出流の時

大権現の御ついでして義之の陣かきに

こ捕とら獲とら同とらく討死うと 法名源宗

康次

加々太馬 生誕不可

十五歳よりして初はつめ

大権現より侍り為なるの御陣かきに侍まり

長久手合戦の時先陣さきに侍まり

二ツと侍りうけら伏見ふし後河ご御ご成なり

の取とり書かとつと

元和三年八月廿日後河ご御ご成なり病びやう

死し年七十一 法名源宗

某

彦六郎

早世

法名清徳

正次

かたは

生國日か

開原陣のとき

大將親の侍も勤められたら

名徳院殿よりつとく大坂の家代陣より

まこといふら

將軍家の御代よりびく大御書の御代

とたりうみら 釣命よりして開原

北野山の檢使ともり

武州王子の秋津邊屋の時より

寛永十四年九月十九日病死享年四歳

法名禮安

三威

内苑助

台酒院殿と申す事

將軍家より多々所小姓と書

と勤心

正茂

市良左衛門

生女之河

利次

主末

大控規

台酒院殿より

元和八年江戸にて

法名宗心

康正

物進

寛永六年

將軍家より侍人等

直次

新五右衛門

伏見におわく

大権現と称し

御命より侍人

下向

台酒院殿より侍人等

大坂兩度の御陣に侍

元和二年 御命より侍

將軍家一つは侍り 御酒院番の御代より

又御歩の頭より侍り 御酒院番の御代より

おしよらふ月心より侍

直正

孫次左衛門

寛永十一年

將軍家とねー

同十一年御書院きんごんと勤心

同十八年小姓こしやうのいんと勤心

重しむら

七郎しちらう 七回しちかい

寛永十五年十二月

將軍家とねー

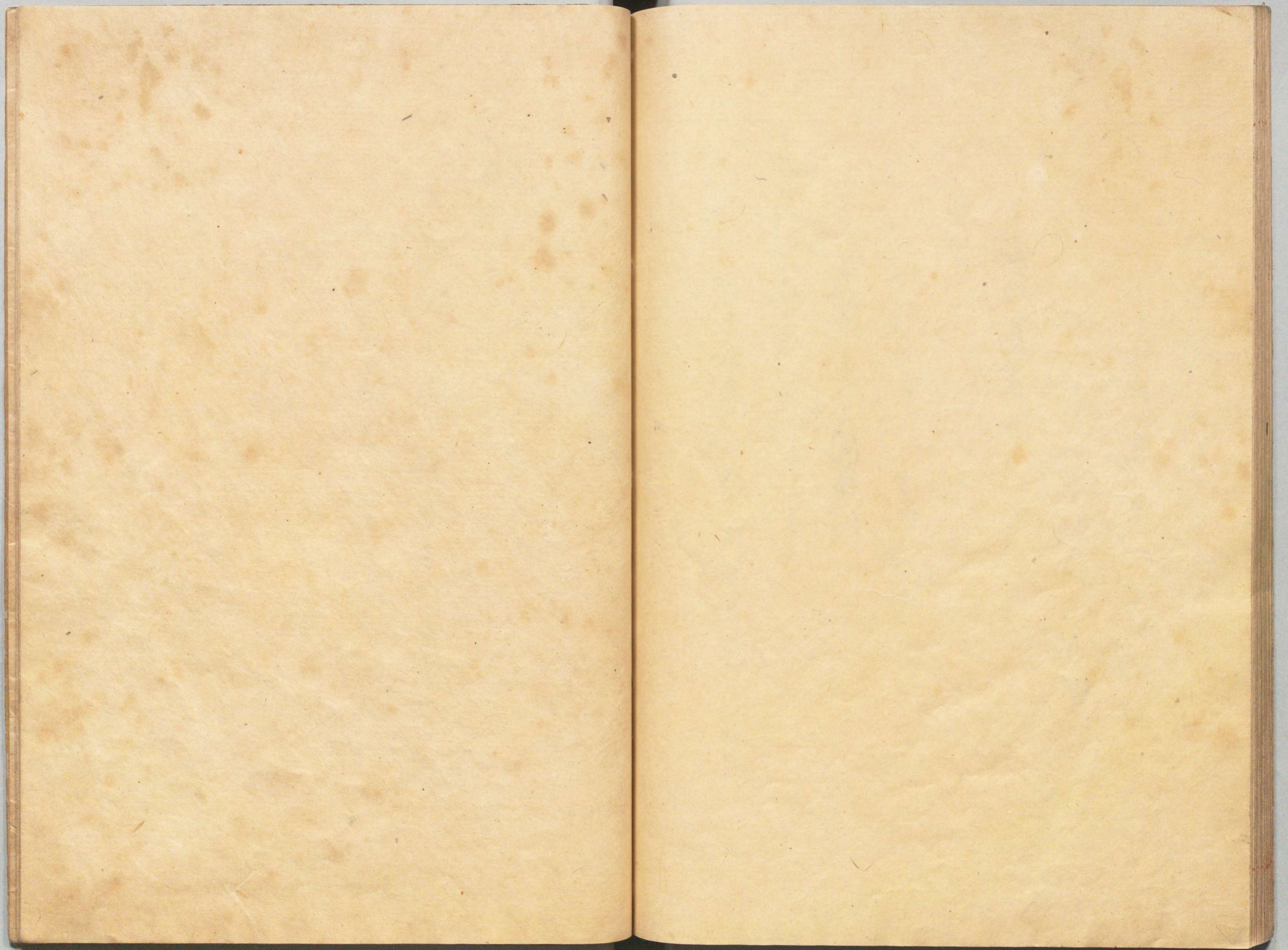
同十九年六月御書院きんごんと勤心

次つぎ

法はふ存ぞん

七回しちかい後ご河が

家いへ紋もん為な葉は



● 系清

家傳まゝに親忠之の弟として大徳
源次郎系元が中つり三河源
伯と

系孝

三郎重 任所不明
弘治二年二月廿五日討死 法名如海

正業

久安

あまのり

東照大権現まつるをうらむに於て十ヶ村の
卯子七ヶ村と稱して漸恨し位を大後
和泉守親業大属と号し正業と教して
その領地とうぐんとせし時中書
業之兄が仇と執ぎんぐあし大後とせし

やがうく放火して捨く親業尾刈
くし家

業之

公書

大権現まつるをうらむに於て

永祿五年三月一日向系蜂起の時

教度合戦あり中しと古品の戦は業之

水野宗と宗と蜂起は忠告と事

まゝ軍切り

二侯の滅とせり此を此のりを別 是れ
寺持と治り

天正十八年相列小田原陣の時

大権現 業多 命なりし 佐長の中

よおおく 秀吉と 饗庭を 後より 此業入

と治り

り治ら 為書番と 勅め 但子 百廿人

り治ら 治りし 病死と

系次

大馬助 監物

大権現より治り

秀吉より 治り 治り 治り 治り

の 治り 治り

同 五年 開ヶ原 陣 佐長

同 六年 先 祖 代 治り 治り

歩 卒 治り

元和九年 鈞命ついでふし

右軍家みぎぐんつる魚うしほりそ御上みかどの供ともなりす
同年八月このとしのあき後ご五位ごご下したに叙おとし監物けんぶつ
任にんせし

正武ただたけ

右馬みぎうま八

實まことの喜よろこばし勅ついで六昌むさし次ついでが子こら昌むさし次ついで業わざ次ついでが妹いもうと
とめとらゆし正武ただたけと名なしうしひく子こと

喜よろこばし逸はな見みの族うぢらり勅ついで六

大おほ杉すぎ隈かみしつる

寛ひろ永なが十六むね年とし正武ただたけ

将軍家しょうぐんと誅つとす

月十七つき年とし五月ご月げつ御みかど上の院いん番ばんと勅ついで七

家いへ收と 葛葉くずは

